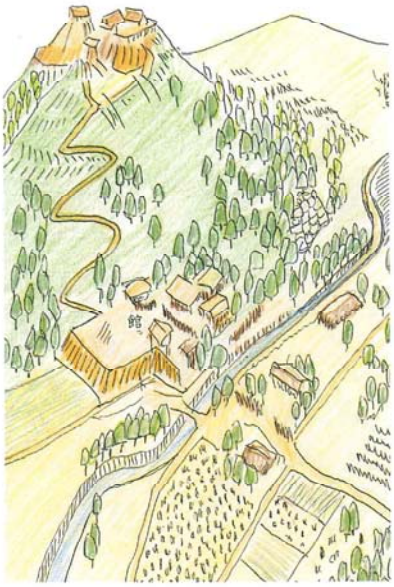
八　戦国時代の山城と城下町

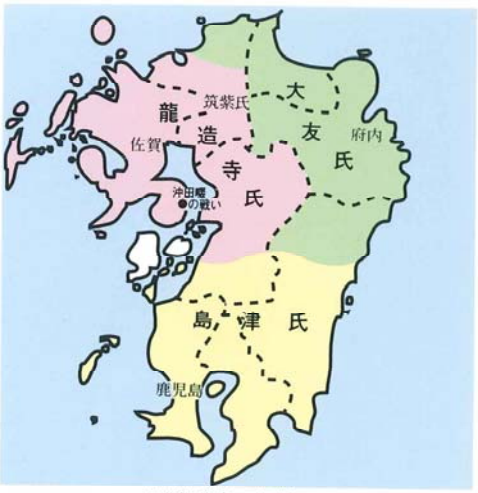
―筑紫氏の居城　勝尾城―

みなさんは「城」という言葉から何を連想するでしょうか。広い平地に大きな石垣や高い天守閣を築き、深い堀をめぐらしたものが想像されるのではないでしょうか。しかし、それは平城とよばれる江戸時代の城のイメージなのです。全国で二万を超えるといわれる城跡は、大半がそれ以前に築かれたものです。武士が登場してきた平安時代の後半から鎌倉時代にかけては館の時代で、武士は周囲に堀をめぐらせた平地の館に住んでいました。やがて戦乱の時代を迎えると、ふだんは麓の館に住み、敵に攻められた時には、立てこもるのに最も都合のよい山に築いた城（山城）を基地にして戦うようになりました。南北朝時代から戦国時代にかけてのこの時代は、山城の時代といえます。実は、日本の城はこの時代に最も多く築かれたのです。続いて江戸時代になると平城の時代となり、政治と経済の中心地に城が築かれ、武士や町人の住む城下町がつくられました。そして、一六一五年に出された※一国一城令により、大名の居城以外は破壊され、ほとんどが城としての役目を果たさなくなってしまったのです。



山城の想像図

ところで、戦国時代の末期、中央では織田信長やその後継者の豊臣秀吉が、全国統一事業を進めていたこ

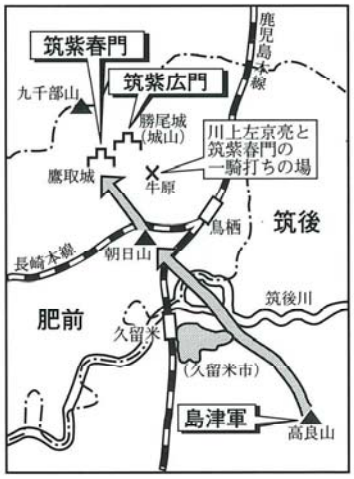


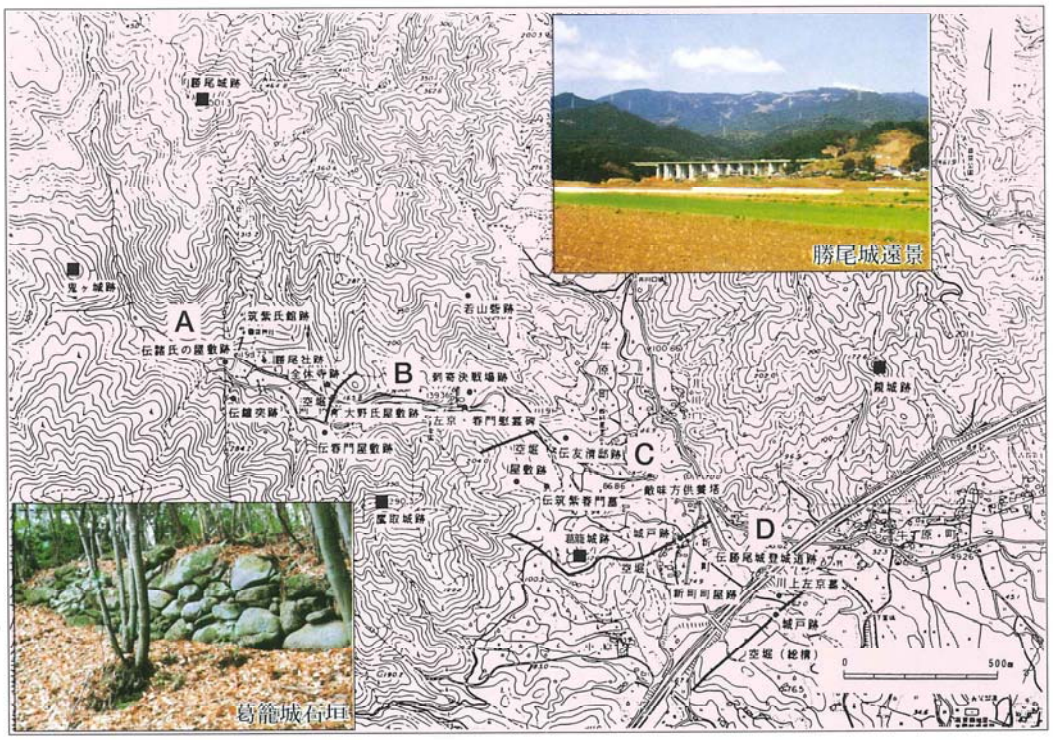
16世紀後半の九州

ろ、九州では大友氏、龍造寺氏、そして島津氏が三大勢力となり、攻防を繰り返していました。一五八四年、肥前国を中心に勢力をふるっていた龍造寺隆信は、島津氏と結んだ島原の有馬氏を攻めました。しかし、敵の巧みな作戦のため隆信は討ち死にし、龍造寺方は大敗してしまいます。そのころ、勝尾城（鳥栖市牛原町）を居城としていた武士は、筑紫広門でした。広門は隆信の死後、大友氏に属するようになります。その結果、九州統一を目指して北進する島津氏の攻撃を受けることになりました。

一五八六年七月六日、島津氏は総勢二万から三万の兵力で勝尾城を攻めました。一方、城を守る筑紫氏の軍勢は三千程度で、よく戦いましたが、力の差は明らかでした。最大の激戦は、勝尾城を守るための城の一つである鷹取城下で行われ、広門の子、春門（一説には弟）がめざましく奮戦しました。城を出て、次々と敵を倒しますが、隆信の首をとった川上左京亮と刺し違えて戦死しました。この戦いで有力な武士が多数討ち死にし、本城勝尾城に立てこもった広門も七月十日、ついに降伏します。そして、筑後国大善寺（久留米市）にとらわれました。その後、豊臣秀吉の九州出兵を機に脱走した広門は勝尾城を奪い返しました。ところが、翌一五八七年、秀吉により筑後国上妻郡（八女地方）に移され、勝尾城は廃城となります。それ以来、城は草木におおわれ、城下は谷間の静かな集落となって現在にいたっているのです。

勝尾城の攻防戦





勝尾城と城下町（鳥栖市教育委員会資料より作成）

筑紫氏が勝尾城を本拠地としたのは、一四九七年からで、広門の三代前にあたる筑紫満門の時です。それからおよそ九〇年間、筑紫氏は有力な国人として活躍しますが、広門のころにその勢力を最も広げ、勝尾城を中心に二十六の支城を持っていました。その範囲は、現在の鳥栖市、基山町を中心に中原町や北茂安町から福岡県の一部に及んでいます。筑前・筑後・肥前の三か国の境にまたがっており、また、博多や大宰府に通じる交通の要衝を押さえていたといえます。勝尾城は山城ですが、城下には武士や職人・商人が住んだと思われる場所が見られ、福井県の朝倉一乗谷のような城下町がつくられていたのではないかと考えられています。

それでは、勝尾城とその城下町について具体的に見ていきましょう。勝尾城は城山（標高五〇一メートル）の山頂に築かれています。主郭を中心として大きく三つの曲輪がつながっており、谷を取り込み、鳥が

翼を広げているようなつくりになっています。現在、土塁や石垣・空堀の跡が見られます。この勝尾城を中心として、安良川が流れる東西約二キロメートル、南北約一〇〇～四〇〇メートルの谷に城下町がありました。そして、この谷をはさんだ南北の尾根上に四つの支城と一つの砦があり、城下町を守っていました。北に鏡城と若山砦、南に葛籠城と鷹取城が配されており、谷の最も奥に鬼ヶ城がありました。谷には城と対応して土塁と空堀がつくられていました。最も外側にあるのが、総構の空堀といわれるもので、谷をさえぎるように南北約五〇〇メートルにわたって築かれています。この空堀の内側が城下町となります。

では、城下町はどんな様子だったのでしょうか。空堀によって区切られた四つの地区に分けて見ていきましょう。A地区には筑紫氏の館を中心に勝尾神社や全休寺など筑紫氏に関係の深い社寺、非常事態を知らせる鐘つき堂などがあったと考えられます。政治・経済、そして信仰の要となる所で、谷の奥、本城勝尾城の真下にあたります。B地区は筑紫氏一族や有力家臣の屋敷があった地域だと考えられます。C地区には馬場があり、職人が住んでいたと思われます。最後にD地区ですが、ここは字新町といい、地名から考えて新しく成立した町があったと思われます。一九八九年の発掘の結果、登城道と伝えられる道の両側に町屋跡が確認され、道では市も開かれていたと考えられます。江戸時代に描かれた勝尾城の絵図が今も残っており、昔の姿をしのばせてくれます。

肥前州基肄郡勝尾山筑紫広門公城之図
（福岡市博物館蔵）